

本学の教育に関するヒアリングについての報告（製造業）

学生支援部キャリアサポート課

ヒアリングの概要

2026 年 9 月 8 日に卒業生が複数在籍する企業（製造業）に対し、本学の卒業生に対する教育に関するアンケート結果を踏まえたヒアリングを実施した。本学キャリアサポート課のスタッフが協力企業を訪問し、人事・採用に携わる 2 名の社員の方にご対応いただいた。

ヒアリングにご協力いただいた企業について

産業用の印字・表示に関わる機器とサービスを提供する企業である。食品・医薬等の分野を中心に、製品の表示に用いる機器の提供から、資材の供給、保守までを一貫して担い、産業用途ならではの多様な印字・表示のニーズに応えている点に強みがある。複数名の卒業生が在籍しており、本学学生をインターンシップに受け入れていただいている。

企業への趣旨説明

本学の教育活動を改善し続けるために自己点検・評価を行っている。そのために学外のステークホルダーからの評価を受け、教育活動に反映させていく。以下の資料に基づき、主に次の観点から評価をしていただいた。

【提示資料】

- ・卒業後における本学の学びの評価について（卒業生による大学への視点）
- ・本学における学びの評価とその可視化について（企業等による大学への視点）
- ・データからみる清泉女子大学の学び（データによる教育結果の振り返り）

【評価の観点】

- ・採用において重視される力と本学の教育について
- ・清泉女子大学が輩出する卒業生について
- ・学修成果の可視化とデータの活用について
- ・生成 AI の活用について

1. 採用において重視される力と本学の教育について

2026 年 1 月に実施した企業調査の結果を基に、採用時に重視される能力について意見交換を行った。調査結果では、相手の立場や意図・関係性・状況を踏まえて聞き、理解する力、相手に伝わるように話す力、意見の異なる相手とも関係を保ち対話を続ける力、失敗しても諦めずに努力を続ける力、必要なスキルを自発的に獲得しようとする態度といった、コミュニケーションに関わる項目が重視されている。同社においても同様の傾向であることが確認された。

特に、伝える力と聞く力は一方のみでは十分ではなく、双方が備わって初めて実務で機能すると

の指摘があった。話すことを得意とする学生であっても、実務のなかで聞く力の重要性に気づく場面が多いという実感が示された。

これに関連して、本学における教員と学生の距離の近さは独特であるとの評価をいただいた。規模の大きい大学においても教員と学生が親密な関係を築く例はあるが、本学では通りにすぎずに教職員と学生が気軽に言葉を交わす関係が日常的に成立している点が特徴的であるとのことであった。こうした関係性から育まれる豊かさは、本学の特徴として大切にしていけることが望まれている。

また、採用時に重視される要件として業務に関連する知識については、必ずしも強く求められるものではないという指摘があった。企業の事業内容についての理解は重要ではあるが、入社時点では、学生時代にこそできる経験を豊かにすることが期待されていることが示された。同社の面接においても、学生から「入社までに身につけておくべきことはあるか」と問われることがあるが、特段の準備は不要であり学生時代を十分に過ごしてほしいと伝えているとのことである。採用にあたっては学生自身の将来の可能性と人物を評価するという点で、企業調査の結果と同社の方針は一致していると考えられる。

2. 清泉女子大学が輩出する卒業生について

同社に在籍する卒業生の状況について伺った。全体として、卒業生はそれぞれの職場で力を発揮しているとの評価であった。

同社に在籍する卒業生は、それぞれの職場で、必要な準備に先んじて気づき、自ら相談や報告を行う姿勢が評価されている。周囲に自ら声をかけ、人に関わろうとする姿勢が高く評価されており、後輩や新入社員からの評判も良好である。また、日々の業務のなかで社内外の関係者をつなぐ役割を果たしており、社内からも評価の声が寄せられているとのことであった。

卒業生の印象としては、明るくはつらつとしており、自信を持って人と関わっている点が挙げられた。本学にはそうした学生が多いという印象を持たれている。自己評価の高さは重要であり、自信がなければ取り組めない業務もあるとの指摘があった。

なお、同社のインターンシッププログラムには本学学生が参加しており、卒業生の姿と重なるような明るく元気な学生であるとの評価をいただいた。

3. 学修成果の可視化とデータの活用について

「データからみる清泉女子大学の学び」に基づき、GPS-Academic（ベネッセi-キャリア）の結果において思考力の伸長が確認されている点を説明し、こうした力が実務においてどのように生きるかについて意見交換を行った。

同社からは、協働的思考力の大切さについても言及があった。採用選考の面接においても、グループワークにどのように取り組んできたかを確認している。入社後の業務は個人で完結するものが少なく、グループや部署単位での活動が中心となるため、周囲と協力して働く力が求められる。個人として努力する姿勢も当然に評価の対象ではあるが、面接において周囲との関わりが見えない場合には懸念を抱くケースもあるとのことであった。

この指摘を踏まえると、本学としては、グループワークの経験そのものを評価する仕組みや、その成果を可視化する取組を検討する余地がある。個人の到達度に加え、協働の過程と成果を記録・可視化することが、本学の学びを社会に伝えるうえで有効であると示唆された。

4. 自己肯定感・自己評価の醸成について

卒業生に対する評価に関連して、何よりも自信を持って人と関わることが重要であるとの意見が示された。社会人として働くうえで、自己肯定感の有無によってパフォーマンスが大きく変わることであった。

本学の教育に即した例として、地球市民学科におけるフィールドワークが挙げられた。全員で取り組み、全員で意思決定していくプロセスの経験には意味がある。皆で決めて達成する経験を重ねることで達成感が得られ、それが自己評価の向上につながると考えられる。関係性のなかでの経験を通じて自己肯定感・自己評価を高めていく取組が、本学の教育において一層重視されるべきであると示唆された。

5. 生成 AI の活用について

(1) 同社における生成 AI の利用状況

この1年で印象が大きく変わり、社内利用にはまだ距離があるという状況から、部署ごとの運用が活性化しており、全社的に展開する段階へ進みつつある。利用は増加しており、社内の資料作成に用いられる場面も増え、ほとんどの部署で何らかの形で利用されている。

部署による違いも見られる。情報管理部門では、当初は自分でできるために使っていなかったという状況であったが、最近利用を開始し、受け入れてからの活用は早いという。ただし、生成 AI の出力結果を見極める力が重要であるとの指摘があった。この「見極める力」は、本ヒアリング全体を通じて繰り返し示されたキーワードである。

(2) 本学の教育への示唆

生成 AI の出力を見極めるためには、その土台となる基礎的な教養が必要であり、これは文学部における学びと重なる。専門課程における古典・外国語・歴史等の学びを直接仕事に生かしたいという思いは学生にあるであろうが、そのすべてが直接的に生かせるわけではない。文学部出身者が社会や仕事において何を生かせるのかは学生にとってイメージを持ちにくく、この両者をつなぐことこそが大学のキャリア教育の役割であることについて同社と本学の見解が一致した。

学生や新入社員に求められる力としては、読む力、検索して調べる力、そして生成 AI が出力した文章を判断する力が挙げられた。これらの力は、文学部であれ法学部であれ、学問領域を問わず等しく必要とされるものである。

6. まとめ

本ヒアリングにより、企業ご担当者から本学教育の成果と課題に関して貴重な示唆を得た。要点は次のとおりである。

第一に、採用において重視されるのは聞く力と伝える力を中心とするコミュニケーションに関わる力であり、業務関連知識や資格の重視度は高くない。ポテンシャルと人柄を評価するという同社の方針は、企業調査の結果とも整合していた。本学における教員と学生の距離の近さは、こうした力を育む環境として評価されている。

第二に、同社に在籍する卒業生は、自ら人に関わろうとする姿勢や社内外をつなぐ役割において高く評価されており、明るさと自信を備えている点が印象として挙げられた。

第三に、GPS-Academic により確認される思考力の伸長のうち、とりわけ協働的思考力が実務において重要である。本学としては、グループワークの経験と成果を評価・可視化する取組を検討する必要がある。

第四に、関係性のなかで達成を重ねる経験が自己肯定感・自己評価を高め、社会人としてのパフォーマンスを左右する。フィールドワーク等、本学が有する教育資源をこの観点から改めて位置づけることが求められる。

第五に、生成 AI の活用が急速に進むなか、その出力を見極める力の基盤となる基礎的な教養は、本学の学びと重なるものである。学生が自らの学びと仕事とのつながりを描けるよう支援することが、本学のキャリア教育に求められる役割である。

これらの知見は本学の教育改善と人材育成に資する重要な指針であり、今後の自己点検・評価に着実に反映していく必要がある。

以上

本学の教育に関するヒアリングについての報告（情報通信業）

学生支援部キャリアサポート課

ヒアリングの概要

2026 年 9 月 11 日に卒業生が複数在籍する企業（情報通信業）に対し、本学の卒業生に対する教育に関するアンケート結果を踏まえたヒアリングを実施した。本学キャリアサポート課のスタッフが協力企業を訪問し、採用・教育業務に携わる 2 名の社員の方にご対応いただいた。

ヒアリングにご協力いただいた企業について

国内ポータルサイトをはじめとするインターネットサービスについて、Web システム・アプリケーションの開発、運用保守、監視、テスト検証等を一貫して担い、EC サイト構築、ビッグデータ解析、スマートフォンアプリ開発、365 日運用支援等のサービスを提供している。アウトソーシングプロバイダーとして、変化の速いインターネット領域における技術・ビジネスの変化に迅速に対応することを強みとしている。複数名の卒業生が在籍しており、学科を問わず継続的に本学学生を採用いただいている。

企業への趣旨説明

本学の教育活動を改善し続けるために自己点検・評価を行っている。そのために学外のステークホルダーからの評価を受け、教育活動に反映させていく。以下の資料に基づき、主に次の観点から評価をしていただいた。

【提示資料】

- ・卒業後における本学の学びの評価について（卒業生による大学への視点）
- ・本学における学びの評価とその可視化について（企業等による大学への視点）
- ・データからみる清泉女子大学の学び（データによる教育結果の振り返り）

【評価の観点】

- ・統計・データサイエンス及び生成 AI の活用について
- ・人文科学系の学びと実務との接続について
- ・清泉女子大学が輩出する卒業生について
- ・採用・評価の視点と本学への期待について
- ・卒業生のキャリア形成と定着について

1. 統計・データサイエンス及び生成 AI の活用について

企業調査においては、採用時に統計やデータサイエンスの知識・スキルが重視される度合いは低いという結果が得られている。この点について同社からは、採用時には重視しないものの、実務においては活用しているとの説明があった。

同社では、社員全員が活用していく方向で取組を進めている。顧客からの要請もあり、活用が前提となっていることから、活用しなければ業務そのものが成り立たないという水準にあるという。実際に、Web サービスの開発・運營業務においては、活用しなければ求められるスピード感に追いつかないとのことであった。

すなわち、採用選考の時点では知識・スキルが求められていない一方で、入社後は全社的に活用が前提となる技術であり、採用時の重視度と実務上の重要度が乖離している点に留意が必要である。本学としては、採用要件としてではなく、入社後に自ら習得していくための基盤をどのように整えるかという観点から検討する必要がある。

2. 人文科学系の学びと実務との接続について

本学の学びが実務にどのように接続するかについて、生成 AI の活用を切り口として意見交換を行った。

同社からは、論文を書くことの意味が改めて指摘された。論理的思考力がなければ生成 AI を使いこなすことはできない。生成 AI を活用するうえでは、自分の考えを文章にして指示を出すことが重要なスキルとなるが、これはまさに論文執筆によって磨かれる力である。また、論文を執筆する作業とは、自分が何を「わからない」のかを可視化する作業でもあるとの指摘があった。

自分の考えを文章化していく力が弱い場合、業務上のアウトプットもどうしても質の低いものにとどまってしまう。人文科学系の学びは、この点において実務と明確に接続しているといえる。

ただし、学生時代に生成 AI に頼りすぎると、自分の力で書けなくなるという懸念も併せて示された。本学としては、生成 AI の利用を前提としつつも、自ら考え、自ら文章を組み立てる経験を確実に確保する教育設計が求められる。

3. 清泉女子大学が輩出する卒業生について

(1) 論理的思考力と素直さ

同社に在籍する卒業生については、論理的思考力が高いという評価をいただいた。加えて、人や物事に対する素直さがあり、しっかりと学ぶ姿勢を備えているとのことである。

入社直後は情報系出身者等の経験者と比べてスピード感で劣る面があるものの、素直に学び吸収するため、中長期的には遜色のない水準に達する。3 か月程度の新入社員研修という短い期間であっても、明確な伸びが見られるという。いったんスイッチが入れば、その後も継続して学び続ける点が評価されている。

必要だと判断すれば自ら努力を継続することができる点も評価された。うまくいかないときにどう対処するか、すなわち学び方そのものを身につけてほしいという同社の期待に対し、本学の卒業生はそれを実践できているとの評価であった。

なお、「データからみる清泉女子大学の学び」において、GPS-Academic（ベネッセ i-キャリア）の結果に思考力の伸長が確認されている点についても説明を行い、同社が卒業生に対して抱いている実感と整合するものであることが確認された。

(2) 学ぶ姿勢

評価の観点として、勤務時間外にも自己投資（学習活動）を行っているか、決められた講師がいない状況でも自律的に学ぶことができるかという点が挙げられた。新入社員の成長を10年のスパンで見ると、自己学修の積み重ね次第で情報系専攻の出身者を追い越すことも十分にあるとのことである。

なお、少し上の世代（10年程度前）の学生は卒業後の選択肢としてIT業界やSE（システムエンジニア）に対するハードルを感じていたが、近年は10～15%の学生が安定的にIT業界に進んでおり、本学の進路傾向が変化していることがわかる。

(3) 学科の特性にみられる傾向

文化史学科の卒業生については、物事に対して熱意を持って向き合う傾向があるとの指摘があった。母校への愛着も強く、何かに関心を持つと一気に取り組み、自ら学ぶ姿勢が開花する点が特徴として挙げられた。

また、興味・努力・タイミングが重なることで、それまでの蓄積が一気に力として現れる例が見られるとのことであった。本学の学生には、期待されたいという志向があり、期待されることによって力を発揮する傾向があるとの見立てが示された。

4. 採用・評価の視点と本学への期待について

同社における人材評価の視点について伺った。当該業界の仕事においては、結局のところその仕事「好き」である人が強いという。新しいものへの興味がなければ新しい技術に触れようとせず、そうした興味を持ち、それに基づいた行動が自然にできる人が業界に残っていく。このマインドの有無が、業界で生き残るうえで大きな意味を持つ。

また、本学の学生について、仕事に対して優劣をあまり気にしない点が評価された。当該業界では「つくる」ことを最優先する開発優位の見方をする者が多いが、同社はソフトウェア・システムの制作に加え、大規模サービスのサポート業務も多く担っている。業務の種類に優劣をつけずに取り組む姿勢は、同社の事業構造に適合するものである。

本学に期待することとしては、まず本当に助かっているとの評価をいただいた。学科によらず採用を行っており、本学には成長する土台ができているとのことであった。

5. 卒業生のキャリア形成と定着について

(1) ライフイベントの影響

ライフイベントや生活環境の変化を機に退職した卒業生もいれば、就業を継続している卒業生もいる。背景としては、仕事と家庭の状況に鑑みて一旦離れるケース、手に職がついているため後に復帰することを想定しているケース等が考えられる。就業7～8年程度で職責が上がる時期と重なると、両立のハードルが上がりやすいという。

全力で走り続けるタイプほど、あるとき糸が切れるように離職に至ることがあり、仕事や自分自

身の生活に対して、どちらも十分にやりたい、真面目に取り組みたいといった意識が影響している可能性があり、力を入れるバランスをとることで就業を継続しやすいと考えられる。ただし、過度の一般化には注意が必要で個人差が大きいことも併せて指摘された。

30 歳前後に離転職のピークとライフイベントが重なっている可能性がある。マネジメントに入るタイミングでの支援、すなわち責任の持ち方・持たせられ方に関するリーダーシップ教育のような観点で、大学段階の教育においても検討に値するのではないかと示唆を得た。

(2) 近年の離職傾向

同社としては、まずは 10 年継続して働いてほしいという考えである。費用をかけて教育を行っているため、早期の転職は初期教育投資が他社へ移転する結果となる。近年の早期転職については理由が判然としないケースも多いという。

(3) 同社の課題認識

同社の課題として継続的に働けるように支援していきたい、そして本学としても卒業後も経済的基盤を維持してほしいという、双方の意向が共有された。これは個人の生活と仕事のバランスという社会課題の反映でもあり、本学のキャリア教育においても、ライフイベントを織り込んだキャリア形成の視点を学生に提供する必要があると考えられる。

6. まとめ

本ヒアリングにより、企業ご担当者から本学教育の成果と課題に関して貴重な示唆を得た。要点は次のとおりである。

第一に、統計・データサイエンスや生成 AI は採用時に重視されない一方、実務では全社的に活用が前提となっており、採用時の重視度と実務上の重要度が乖離している。採用要件としてではなく、入社後に自ら習得するための基盤づくりという観点からの検討が求められる。

第二に、論文執筆を通じて培われる論理的思考力と文章化の力は、生成 AI を使いこなすための前提条件として明確に実務と接続している。人文科学系の学びの意義がここに確認された一方、学生時代に生成 AI へ依存しすぎると自ら書く力が育たないという懸念も示された。

第三に、本学卒業生は論理的思考力と素直さを備え、学び方そのものを身につけている点が評価されている。入社直後のスピード感では経験者に劣るものの、中長期的には遜色のない水準に達しており、GPS-Academic における思考力の伸長とも整合する評価であった。

第四に、当該業界においては対象への興味・関心と、それに基づく自律的な行動が定着と成長を左右する。また、業務の種類に優劣をつけずに取り組む本学学生の姿勢が評価されている。期待されることで力を発揮する傾向があることから、期待を明示的に伝える関わり方が有効であると考えられる。

第五に、卒業生の定着に関しては、就業 7～8 年程度で職責が上がる時期とライフイベントが重なることが離職の契機となり得る。責任の引き受け方に関する教育や、ライフイベントを織り込んだキャリア形成の視点を、在学中のキャリア教育において扱う必要がある。

これらの知見は本学の教育改善と人材育成に資する重要な指針であり、今後の自己点検・評価に
着実に反映していく必要がある。

以上